

50 歳時点での収縮期血圧 130mmHg で認知症リスク上昇

50 歳、60 歳、70 歳での収縮期および拡張期血圧と認知症発症リスクとの関連、そしてフォローアップしている心臓血管病がその関連に介在しているかについて検討した。

Whitehall II コホート研究において、1985 年、1991 年、1997 年、2003 年に 8,639 人の収縮期および拡張期血圧を測定した。認知症の発症については 2017 年まで電子健康記録で確認した。分析の結果、50 歳での収縮期拡張血圧が 130mmHg の場合に最も認知症リスクが高かった（ハザード比 1.38）。60 歳時、70 歳時の収縮期血圧は認知症との関連がみられなかった。また、拡張期血圧では認知症発症リスクとの関連はみられなかった。平均年齢 45 歳から 61 歳の間に、より長期間にわたり高血圧（収縮期血圧 130mmHg 以上）であった人では、高血圧でない、または高血圧であった期間が短かった人に比べて認知症リスクが高かった（ハザード比 1.29）。また、追跡期間中に心臓血管病でなかった被験者では、50 歳時点で収縮期血圧 130mmHg 以上のとき、認知症リスク上昇と関連がみられた（ハザード比 1.47）。

したがって、50 歳時点での収縮期血圧が 130mmHg 以上であると認知症リスクが高くなり、このリスクは心臓血管病とは関係しないことが示唆された。

出展：European Heart Journal. 2018 Jun 12; doi: 10.1093/eurheartj/ehy288.